

OPINION 私の考え

「災害時緊急医療に対する海上支援」

～ 新「深江丸」を海陸連携の拠点船に ～

震災の教訓・悔しさを活かす 新「深江丸」の代船建造のコンセプト

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、通信網の途絶と交通渋滞が人命救助、医療、消火などの緊急活動を停滞させたことは記憶に新しい。このようなさなか、海上では船を利用した海からの支援が活躍していた。しかし、緊急初動時に船の活用は十分でなかった。特に阪神・淡路大震災では東西幹線道路が高速道路の倒壊と、大渋滞で交通途絶したことに通信網の混乱が加わって患者を近郊の病院に移送することができなかった。これは関係者の誰もが、自動車による東西方向への搬送しか思いつかなかったからである。津波の心配がないとなれば、患者をいち早く浜手に運び船を使用して大阪等の近郊大都市へ患者を搬送する。このことが実際に行えていたなら、より多くの尊い生命を救うことができたはずであった。



震災の教訓・悔しさを活かす 新「深江丸」の代船建造のコンセプト

平成7年以来、阪神淡路大震災での海上からの支援実績の検証結果をもとに、海側の受け皿としての練習船ネットワークの構築、港と船の連携による海上危機管理システムの構築、災害時における海上支援「防災船」構想、『防災船構想政府委員会』への参画、国土交通省、学会、地方自治体等の委員会への参加、『危機管理・海上支援ネットワーク』設立、学部附属練習船「深江丸」の災害時運用規定の策定、災害時緊急医療支援システムの機能総合化のための海陸連携拠点の構築、透析医療界とのネットワーク連携等々を通じて種々の社会活動・研究活動を継続してきた。しかし、問題は阪神・淡路大震災を教訓にして、有事の際に被災者の命を救う緊急時医療アクションプログラムをどう用意するかである。震災から10年経過した今、透析医療界との連携による「災害時緊急医療に対する海上支援」の実現をバネに、さらに、新「深江丸」を海陸連携の拠点船にするコンセプトを新「深江丸」の代船建造に活かしたいと考えている。



日本海事新聞「燈光」2004年9月1日掲載

「災害時緊急医療に対する海上支援」

— 新「深江丸」を海陸連携の拠点船に —

神戸大学海事科学部 教授 井上欣三

来年は阪神淡路大震災から10年になる。災害時最も迅速になされるべきことは緊急医療と患者の移送

神戸大学海事科学部深江 医療側と船側設置陸連携を促進するための「深江丸」代船建造のコンセプト

筆者は震度7の激震を体験し、その後、阪神間の惨状の真っ只中に身を置きながら交通網の途絶と通信



震災の教訓・悔しさを活かす
新「深江丸」代船建造のコンセプト

{gallery}/sousenob/domestic_activities/2004/opinion/concept{/gallery}

[関連論文&社会活動](#)